

200メートル潜航 日本人仰天

「ニッポンクルー」

続・Uボートの記憶

5

1942年10月、第10潜水艦隊のU511号に配属、フランスのロリアン海軍基地へ派遣される。英米軍の反撃開始を遅らせるため、大西洋で補給を妨害する「狩猟作戦」を行う。43年3月、帰港。次の作戦行動の準備が始まった。便乗者はドイツ駐在の日本人で、日本への出航を初めて知った。同年5月10日、ロリアンを出港。1隻で航行する商船への破壊活動はできる

日本回航体験記

が、護衛船団への攻撃はしないよう命令が出される。インド洋に入って8千ト級の商船を攻撃、さらにインド近海で別の商船を夜間攻撃する。68日間の航海の末、(マレー半島の)ペナンに到着。便乗者は下り、飛行機で日本へ飛ぶ。桟橋で日独共催の歓迎会が開かれた。

1週間滞在し、修理を終えて日本をめざす。軍港・呉に到着すると、積み荷の水銀が降ろされ、日本人の手で潜水艦が整備された。通訳とともに大竹(現・大竹市)を訪問する。海軍潜水学校があり、(ドイツから日本に譲渡された)U511を引き継ぐ乗組員が待っていた。経験年数8

12年のベストメンバーで、昼夜、習得に励んだ。操艦、潜航の訓練では何度かははらわされた。ドイツ人がUボートを水深2000メートルまで潜航させると、日本人は仰天した。日本の潜水艦はそこまで深く潜航できなかった。

(43年9月16日に呉港で)盛大な譲渡式が催された。(艦の)ドイツ国旗が降ろされ、日の丸が掲揚された。海軍の招待を受け汽車で箱根へ。休暇を過ごし、東京や京都にも遠出した。まもなく神戸に移動し、(同10月初め)輸送船でシンガポールに向かった。

イタリアから接收した3隻

貯蔵所に7年分の食料

の潜水艦に、U511乗組員のほか巡洋艦の乗組員らが加わって、新たに3組に編成された。潜水艦は輸送用で、うち1隻(UIT23号)は連合国側の魚雷で沈没。乗り込んだ潜水艦「UIT25号」は(軍需物資を積んで)ドイツへ向かったが、エンジンのピストンが故障し、ジャワ島のスラバヤで修理を受けた。その後、神戸の造船所で修理を続けた。

45年5月、ドイツが降伏。兵士のために、日本は神戸と大阪の中間、標高千近い場所に二つのホテルを用意してくれた。(六甲山の)ドイツの食料貯蔵所には肉やソーセージの缶詰など7年間分の蓄えがあった。

米軍機は焼夷弾で海沿いの町(阪神地区)を爆撃する。毎日、空襲警報が聞こえる。それでも日本は戦争を継続したので、米軍は広島(と長崎)に原子爆弾を投下。多数の民間人が死亡した。48年たったいま(執筆時の93年時点)でも死ぬ人がいる。

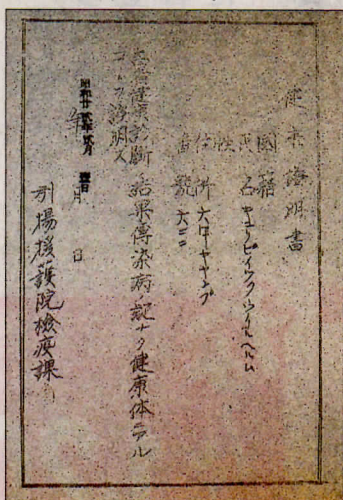
日本が降伏し、8人の米兵が六甲山の宿泊施設の監視にきた。毎朝、点呼があった。初めは捕虜扱いだったが、そのうちに抑留だといわれる。47年2月、民間人と元海軍兵士ら(約1200人)が横浜の米軍仮収容施設に移された。

米軍の輸送船で(ドイツ北部の港町)ブレーマーハーフエンに到着。シュツットガルト近郊の収容施設に入れられた。3千人余りのナチス親衛隊員が監禁されていた。尋問を受けたが、2日後には釈放証明書と汽車の切符が渡された。

47年3月23日、4年ぶりに帰宅した。(U511号で日本に回航した)ウィルヘルム・キュルピックさんの体験記から



●日本で撮影された日独兵士の交流の様子。手前左端でいすに座っているのがウィルヘルム・キュルピックさん。●「健康診断ノ結果伝染病ノ疑(い)ナク健康体ニアルコトヲ証明ス」などと書かれたウィルヘルムさんの健康証明書。住所は「六甲キャンプ」となっている



第2次大戦の日独連合作戦

- 1936年11月 日独防共協定成立
- 37年11月 日独防共協定にイタリアが参加
- 38年4月 国家総動員法公布
- 39年9月 ドイツ軍がポーランドに侵攻、第2次世界大戦勃発
- 40年9月 日独伊三国同盟締結
- 41年6月 独ソ開戦(シベリア経由の日独陸上連絡路が途絶)
- 12月 日本がハワイ・真珠湾を攻撃、太平洋戦争開戦(日独の海上輸送連絡が困難になり、ドイツは潜水艦による物資輸送を提案)
- 42年1月 日独伊軍事協定を締結
- 6月 日本がミッドウェー海戦で主力空母失う
- 43年2月 日本軍、ガダルカナル島の撤退開始
- ヒトラー総統が新鋭潜水艦を日本譲渡へ
- 9月 イタリアが無条件降伏
- 44年11月 マリアナ基地のB29爆撃機が東京を初空襲(阪神間など工業都市への爆撃が激化)
- ドイツ軍が無条件降伏(7日)
- 45年5月 広島・長崎に原爆投下、天皇が戦争終結の詔書を放送(玉音放送)
- 8月 連合国軍総司令部を横浜に設置

元乗組員26人は生還

「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

6

ドイツ潜水艦「U511号」の元乗組員の詳細なリストがある。戦時下の日本に滞在した海軍兵士らの集い「ニッポン・クルー」の世話役だったウィルヘルム・オスターフェルトさん（故人）が仲間から聞き取り調査し、1997年に作成した。

調査リスト

の元乗組員47人のうち戦死16人、病死1人。生き残って45年5月のドイツ敗戦時に日本にいたのは26人で、47年に米軍輸送船で帰国したという。

U511を日本側に譲渡した43年秋、乗組員は輸送船でシンガポールに移動した。イタリア敗戦に伴って日本が接収し、ドイツに譲渡したイタリア潜水艦3隻（U-IT 23号、24号、25号）やドイツ潜水艦「U183号」に分散。

東南アジアから軍事物資をドイツへ輸送する作戦などにあった。フリッツ・シュネーヴィント艦長はU183の艦長に就いたが、45年4月下旬にインドネシア方面のジャワ海で米軍の攻撃を受けて沈没し、戦死した。U-IT 23もマラッカ海峡付近で撃沈され、U511の元乗組員12人が亡くなった。

艦長はジャワ海で戦死

った。パウルの妻子は当時、東京在住だった。

U-IT 25には、同艦長の弟ホルスト・シュネーヴィントさん（故人）が乗艦していた。子どものころ日本で暮らし、潜水艦乗りになった。

東京・大森のドイツ学校（現・東京横浜独逸学園）と一緒に通ったというアルミン・ローテさん（88）が、スイス国境に近いドイツ南部の町ベールリンゲンで暮らしていた。

父が貿易商で、1歳で来日。戦時中まで神戸や東京に住んだ。U511が日本側に譲渡されたころの43年秋、ホルストさんらに在日ドイツ人数人と志願して海軍に入った。

配属されたU-IT 24にはU511の元乗組員15人のほか、42年11月に横浜港で起き

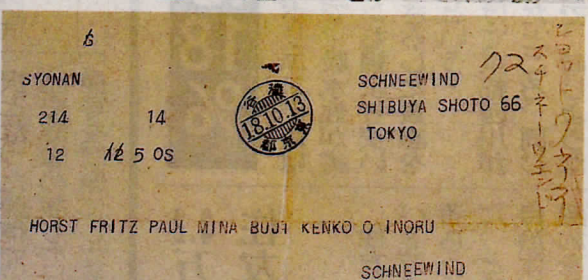
たドイツ補給艦の爆発事故のあおりで配置換えになった仮装巡洋艦の乗組員、イタリアの潜水艦要員らが同乗した。

同艦はシンガポールで軍需物資を積んでドイツへ向かう予定だったが、連合軍の攻撃で給油が受けられず引き返した。その後、修理のために神戸に向かった。ローテさんは通訳者としてインドネシア方面にとどまり、46年末にドイツに帰国した。

「ホルストとは戦後、家族ぐるみで付き合いを続けた。2人とも『ニッポン・クルー』のメンバーだった。惜しいことに、彼は2年ほど前に亡くなった」

「日本語を本格的に勉強したかった」と話すローテさんは、建築関係のエンジニアになった。韓国に勤務していた71年ごろ、帰国前に2週間ほど日本を訪問したことがある。漢字が旧字から新字にすっかり変わり、衝撃を受けたという。

自宅には、石灯籠を配したきれいな日本庭園があった。池にはハスの花が咲いている。「自分で設計した」と自慢げに話した。



「日本はきれいな国だった」と話すアルミン・ローテさん（ドイツ・ベールリンゲン）